



# 若いときの「厳しさ」は 買ってでも…?!

ふく やま とおる  
福山 透

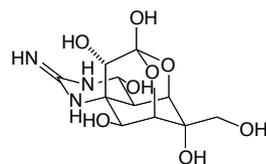
東京大学大学院薬学系研究科

## この研究室は相当ヤバイぞ!

学部4年生になり、後藤俊夫教授が主宰する生物有機化学研究室に配属されて度肝を抜かれたのが、岸義人助教授のグループに、下宿にほとんど帰らず研究室で寝泊まりする院生がいたことだった。2年先輩の中坪文明さん(現京大農学部教授)と中塚進一さん(現岐阜大農学部教授)で、食事とたまの銭湯以外は実験をやっていた。そんな光景を目の当たりにして、学生実験ごときで充実感に浸っていた自分の甘さを恥じたと同時に、相当ヤバイ研究室に入ってしまったと正直思った(が、時すでに遅し)。まず与えられた研究課題は中塚さんの手伝いで、L-アラニンとトリプトファン誘導体からなるジケトピペラジンカルボン酸の脱炭酸によって、*cis*-ジケトピペラジンが優先的に生成するという知見を簡単な例で再現することだった。液体アンモニア中でナトリウムアミドをつくりインドールを*N*-メチル化するのが最初の実験で、たしか3ℓのフラスコで岸先生が手際よく実験するのを横で見ていただけだった。このとき、硝酸鉄を加えると鮮やかな青色がサーッと消えて灰色になるのが印象的だった。岸先生といえば、研究室に入って1週間も経たないうちに「僕を

先生と呼ぶな!」ということで、「岸さん」と呼ばされたので、本稿でも以後は岸さんと呼ぶことにする。

「院試休みなど取らずに実験せよ」と岸さんがいうので実験を続けていたら、募集締め切りで定員2名のところを13名受験することがわかり、「さっさと家に帰って勉強してこい」ということになった。入試の結果、名大理学部平田研の中井久郎君(現小野薬品理事)と私が合格し、再び実験の毎日が始まった。ある日、TLC上で目的物と副生物が非常に近い化合物を精製するために、20×20cmの自家製シリカゲルTLCを12枚使い、極性の低い溶媒で上まで展開しては乾燥し、また展開するという操作を繰り返していたら、結局朝になってしまった。そういった粘りというかやる気というかが評価されたのか、それとも単に戦力不足だけからかはわからないが、4年生の秋に突然岸さんから「テトロドトキシンの全合成チームに入れ」と申し渡された。その頃には、長時間働くことにそれほど抵抗も感じなくなっていた。要するにまわりがよく働く先輩ばかりなので、当たり前にも思えたわけで、人間の環境適応能力はなかなかのものである。



テトロドトキシン

## 私の実験が素速くなったワケ

安城の家から研究室までの通学時間は片道1時間10分だった。この時間をもったいなかったので、月、水、金は大学に泊まることにした。中坪さんは、使っていない狭い実験台や椅子を四つほど寄せた上でも眠られる器用な方だったが、私にはとてもそんな芸当はできないので、建材用発泡スチロールで1畳大の寝床をつくった。ちょうど倉庫に使っ



研究室の新生歓迎会にて(学部4年、前列右から2人目が筆者)岸さん(最後列左端)、後藤先生(2列目左から2人目)らと鍋を囲んだ。

ていた部屋があったので、寝床をコンクリートの床に広げ、その上で寝袋に入って寝たのだ。岸さんは毎朝9時に研究室に来て、夜の12時に帰宅していた。帰宅前に私たちにやってもらいたい反応をいろいろ指示されるのだが、いつも「まあ、あまり無理をするな」といって帰られた。ところがそうやって実験していて幾度日の出を拝んだことか。実験が一段落したところで寝袋にもぐり込んで4、5時間睡眠をとり、起床後実験室に直行して顔を洗い朝食抜きで実験を再開するという生活であった。火、木、土は家に帰って夕食を食べるので、夕方はラーメンをつくって飢えをしのいだ。ときどき岸さんが自分の分もつくってくれと頼んできたが、これがちょっと面倒だった。岸さんはラーメンを揚げる油でお腹の調子が悪くなるという繊細な胃袋(?)の持ち主なので、麺を一度茹でてから丁寧に水洗いし、また茹でなければならず、何を食べても大丈夫な私には二度手間だった。

そういう過酷な日々を送っていたので、火、木、土は絶対に家に帰りたと思っていた。名古屋駅の最終列車が10時40分発。とにかく10時10分までに実験を切り上げなければ、この地獄のようなところに2日続けて泊まらなければならないという恐怖(?)がプラスの方向に働いた。つまり、限られた時間のなかでいかに効率よく実験できるようになるかという修業の機会が与えられたわけである。後年、ハーバード大学で私は実験の手が速く上手だといわれるようになったが(ひょっとして自分だけがそう思っている?)、少なくとも速さに関しては、この環境がそうさせたと思う。

### フラスコといえば…

後藤研究室は北に面した窓際に机が1列に並べてあり、向かって右端に後藤先生、左端に岸さんがいて、学生たちは挟み撃ちされているという大部屋だった。私の机は岸さんの机とキャビネットを隔ててすぐ横にあった。その頃はまだ岸さんもときどき思い立ったように実験をされていて、雑なように見えながら実は非常に要領よくテキパキと動く様子を、私は横から観察していた。本当に実験の上手な人は最初から最後までバカ正直に丁寧な仕事をしないものだなあというコツ(?)が、生来面倒くさがりの私に心地よく印象として残った。ただし、汚れたフラスコ類はすべて私の洗いカゴに放り込まれていたということも書き留めておこう。

フラスコといえば、当時スリ付きのフラスコは貴重品で、私もせいぜい5、6個のフラスコを所持していただけだった。常にバイアルに化合物を移して洗浄乾燥して回転させなけれ



岸さんの実験は非常に手際がよい

ば次の反応を仕掛けられないという自転車操業状態だった。ついでにハーバード時代の小話を書いておくと、岸研のある研究者が急に帰国しなければならなくなり、同室の中田忠さん(現東京理科大学理学部教授)としぶしぶ彼女の実験台や冷蔵庫、キャビネットの後片づけをしたら、なんと400個以上の新品のフラスコがバイアル代わりに化合物入りに鎮座しており、2人とも啞然とした。やはりフラスコは反応に使われるのが本望であろうから、忙しいからといって洗うのを先延ばしにするのはよくない。

### 叱ることも叱られることも大事

岸さんの席が隣だったので、4年生の私はよく質問していたが、ある日「そんな簡単な質問をいちいち僕にするな!」と、ガツンと怒られた。相当ショックで、それ以後は「岸さんなんか質問するものか」と意地を張り、わからないことは極力自分で調べるようになった。また、留守中にかかってきた電話の用件を伝えたが誰からかを聞き忘れ、「子どもの使いのようなことをするな!」と怒られたこともあったが、岸さんに怒られたのは、あとにも先にもこの2回だけである。目上の人に怒られるというのは相当なボディブローではあるが、やさしく説得されるよりは効き目が長続きする。

近ごろは研究室内でも先輩が後輩に対して適切な注意(もしくは頭ごなしに怒る?)をしなくなったと聞かすが、少なくとも危険なことや、明らかにバカなことをしているのを見たら、率直に正すべきだろう。人に注意をするというのは血圧の上がる行為で避けたい気持ちもわかるが、相手の人格を尊重しつつ忠告することで人心掌握術を身に付けることも大切だろう。化学の世界は狭いので、先輩後輩の関係は相当長く続く。後輩に慕われるか嫌われるかは、研究室時代の数年間の心配りにあるので、自分さえよければなどといっていると、将来冷たい風が吹いてくる可能性は大である。